

「わ、御覽、此兒は今日初めて眞の嬉しさを知つた、善い事をした時の眞の嬉しさを、如何に子供でもすべき事は必ずさせねばならぬ、いくらつらい事でも自分の過で、できた事はどこまでもこらへさせねばならぬ、どうか此兒の死際までも此教は忘れさせたくないものだ、之が本當に私の願ひです。」

車のわだち

撃水 生

嘗て郷關を出づるや「業若不成死不歸」と歌ひあはれ、錦を着て歸らずば、骨となつて歸らんをまで盟つて遊學せし身の、脆くも紅塵萬丈の春に酔うて淺ましき身の成り行きを新聞雑誌に歌はるゝ者多かるなかに、雪を集め螢を友とせし古人に劣らぬ苦學をなして初一念を貫徹せんとする學生の時に吾人の耳目に觸る

る者あること、げに萬綠叢中紅一點どやいはん。

▲或年の師走の暮雨持つ夕方の空は、夜に入りて、吹き荒ぶ、北風に雪ど化り見るく二三寸が程も降積りぬ。

吾は背の程より、下宿屋の一室に閉ぢこもりて、消えのこりたる埋火かきおこしつゝ、火影淋しき孤燈の下に、読みさしたる書片つけんとする折しも、時計は一時を指しぬ、あまりに深してけりと思ひながら、いざこれよりがイデンの園ぞと支度にかゝれる時二輪の空車を引く音、表に響きつゞきて、車夫の話も聞へぬ。

「オーサムー、何だか、夜が更けるとべらぼうに寒くなつてきた、まるで、手の先が、ちぎれ相だ……」
時に、さつきからの問題チー、どうも、君の議論はどこまでも、タウトロチー（反覆法）としか考へられないね。それに、もーAが………」

「まう宜いさ。夫よりかも、明日の問題の答を考へ

て置うじやないか、でないど、またまごつくよ……」

車夫の話ども、思へぬ議論に吾は、思はず、窓の戸開

きて首さし出せば、折柄雪やみ空はれて、研ぎ澄まし

たる如き寒月一輪中天にかゝりて、ふり積れる雪と相

映じ白皚々たる一面の銀世界の中に、空車を引ける二

人の黒き影法師は、はや一二町も前に進めり、然も二

人の議論の聲は森たる夜中の寂寥を破つて、時々され

ざれに響き來りつ。

▲ある年の夏の夜、吾は芝なる友を尋ねての歸るさ樓

田御門の邊へ、さかゝりしに、例の車夫は空車を引さ

て後より、しきりに乗車を勧めしかば、水道橋まで、

何程と問へば、二十五錢と答ふ二十錢ならではどて、

すたく急ぎ出せば、殆訴ふるが如き聲音にて、

「旦那、さう仰しやらすに、どうか二十五錢丈、や

つて下さいますし、實の、今晚は、まだ、御客様にあ

りつきませないので……おまけに明日は卅日ですから
少しでも入れないと、またお女將さんにやられますか
ら、ねーどうか旦那、……」



如何にも、其語のあ

はれさに、吾は言ふが

まゝに打乗りしが「お

女將さんにやられます

から」といへる彼の言

葉の解し兼しまゝ、車

上より、その誰なるか

を尋ねしに、

實あね、旦那、下宿屋

の一室を借りてるんで

お聴しい話しなんですが

……エ、そうなんで、

一昨年と昨年と二度士官學校の入学試験を受けたの

ですが二度ども、見んごと、落第らくだいしましたんで、尤もつとも無理むりかも知れないんですが、矢張やばり勉強べんきやうが足りないのです。今度こんどは何なんでも及第きやうだいしたいんですが、またやり損そとふかも知れません。」

嗚呼あゝ、こも亦また、眞しんの車夫しやふにてはあらぬなり。身みの述じゆ懐くわいを談かたりながら韋駄いだ天てんの如ごとく驅かけ過ぎて早くも、定めまたの場所ばしょに來きたりぬ。さればとて約束やくそくの金かねに少し許ゆるりを添そへて、渡わたせば、數度あまた禮らいを述べた楫か棒ぼう取とり上げて、神かみ田だの方ほうへと歸かへり行きぬ。吾われは無量むりやうの感かんに打うたれて、其その後影うしろかげを見送みおくりながら、暫しばしは、其場そのばに衝立つたちつ。(未完)

新年の御歌

雪 中 竹

御製

この上にいくへふりそふ雪ならむ

たかひら高くなりせむりつゝ、

皇后宮御歌

よの程のわらしはたえてくれ竹の

雪しつかにもあくるそらかな

東宮御歌

ふりつもるまかきの竹のしら雪に

世のさむけさを思ひこそやれ

東宮妃御歌

かさりなき君かちとせもこもるらむ

竹のはやまにふれるはつ雪

子らの遊び

東くめ

浪よりあくる 朝日かけ

魚やつらむと 蟹かにの子が、

浦うらの苦屋くまを 起おこき出いでて、

友ともよびかはし 急いそぐなり。

* * * * *